慶應義塾大学ビジネス・スクール

すみだトリフォニーホール（B）

東京都墨田区、「すみだトリフォニーホール」（以下、STH）の事業課では事業課長N氏が、机に広げられたクラシック・コンサート鑑賞に関するアンケート調査の結果を食い入るように読んでいた。この調査は、都内私立大学のアート・マネジメント研究会がクラシック・ファン（STH来場者）と東京東部（墨田区、江東区）から千葉市にかけての一般住民を対象に行なったものであった。

1947年神奈川県に生まれたN氏は、大学卒業後、アメリカの2つの大学で音楽理論、作曲を学び、帰国後神奈川県に音楽の教員として奉職した。その後、93年から神奈川県立音楽堂で現代音楽の企画に従事し、97年からSTHの事業課長をしていた。また、N氏は作曲家としても活躍し「ピアノのためのムーブメント」などの曲を世に送り出している。このように、彼の経歴は芸術家的ではあるが、彼がSTHを運営するにあたっては、ホールのプログラムの芸術的な質を重要視する以上にホールのマネジメントを重要視していた。2002年の10月にSTHは5周年を迎えた。STHが5周年を迎えた今、N氏は都内私立大学が行なった調査結果を踏まえた、STHの新しいマーケティング戦略を策定する必要性を感じていた。

STHの概要

STHの沿革と特徴

STHは、墨田区の「音楽都市構想」を受けて1997年10月にオープンした墨田区所有のクラシック・コンサートに適した公共ホールである。墨田区の文化振興政策からみれば、STHは「優れた音楽芸術の創造と普及に努めるとともに、区民の音楽文化の振興を図る役割」と、「墨田区の「音楽都市づくり」[1]の担い手としての役割」をもっていることになる[2]。STHは大ホール（1801席）と小ホール（252席）の2つのホールを有しており、特に大ホー

本ケースは、慶應義塾大学アート・マネジメント教育研究会の活動の一環で、教材として作成されたものであり経営管理上の巧拙を例示しようとするものではない。本ケース作成は、同研究会のメンバーである和田充夫（慶應義塾大学大学院経営管理研究科教授）と美山良夫（慶應義塾大学文学部教授）の監修のもと、同研究会のメンバーである太田幸治（明治学院大学大学院経済学研究科経営学専攻博士後期課程）が行なった。また本ケース作成にあたり、すみだトリフォニーホールの皆様より絶大なご支援、ご協力を頂いた。ここに改めて感謝の意を表す。（2002年11月）

1 墨田区の「音楽都市構想」は1985年に始まった「国技館5000人の第九コンサート」に端を発している。

2 墨田区企画経営室（2001）『墨田区基本方針』、113～114ページの記述とケース作成者の墨田区役所へのインタビューに基づいている。